

Brisolara, Sharon, 2014, "Feminist Theory: Its Domain and Applications," Brisolara, Sharon, Denise Seigart and Saumitra SenGupta eds., *Feminist Evaluation and Research: Theory and Practice*, The Guilford Press, 3-41.

シャロン・ブリソララ, 2014, 「フェミニズム理論——その領域と応用」

※ () の数字はページ数を表す。

レジュメ作成者による紹介文

本論文の著者である Sharon Brisolara は、コーネル大学哲学科で博士号 (Program Evaluation and Planning) を取得した。彼女は、政策やプログラムを評価するプログラム評価者であり、北カリフォルニアにある政策評価組織 Evaluation Solutions を経営している。

本稿は、フェミニズム理論とフェミニスト方法論を政策評価の実践に取り入れるために著された *Feminist Evaluation and Research: Theory and Practice* の冒頭章であり、主要なフェミニスト方法論が網羅的に紹介されたのち、フェミニスト的な政策評価のための 8 つの原則を提示している。

1. 導入 (3-5)

- 「フェミニスト理論」とは、フェミニストの思想や考え方をさまざまな学問分野や言説に応用することを示す広義の言葉である。
 - 本稿ではフェミニスト研究の主要な関心事を取り上げ、フェミニスト的な評価の基礎となる重要な原則を強調する。
 - フェミニスト理論は、ジェンダーの不公平の性質と結果に深い関心を抱き、公平性の促進、平等な権利と機会の確立、抑圧の廃止に貢献することを意図して適用される。
- 本書や本章は、フェミニスト的研究およびフェミニスト的評価の基礎となる理論的基盤の包括的なレビューを提供することを意図していない。むしろ読者が得られるのは、主要なフェミニズム理論に関連する議論、およびフェミニズム理論の適用可能性に関するアイデアである。

2. フェミニスト的な社会研究の理論 (5-14)

- 本稿では、①フェミニスト経験主義、②スタンドポイント理論、③ポストモダン理論、④グローバル・ポストコロニアル理論、⑤人種に基づくフェミニズム理論、⑥クィア理論を紹介する。

1. フェミニスト経験主義 (5-6)

- 「経験主義」とは、知識の唯一の源泉は「経験」であるという考え方を意味する。
 - ◇ 多くのフェミニスト理論が実証主義を批判的に捉える一方で、フェミニスト

経験主義は、客観性と真理の追求を目指す実証主義の理想と実践に根ざしている。

- ◇ フェミニスト経験主義者は、実証主義的な科学観については受け入れつつ、伝統的な実践およびその産物に含まれる性差別的な側面を批判することにより、実証主義の実践とフェミニストの視点を統合している。
- ・ フェミニスト経験主義に対する批判
 - ◇ フェミニスト経験主義の批判者は、フェミニスト経験主義者が、知識が社会的な力の外部に、あるいは社会的な力から独立して存在すると仮定していることを批判する。

2. スタンドポイント理論 (6-8)

- ・ スタンドポイント理論は、知識は社会的に位置づけられるものであり、社会的に疎外されたグループの人々は、マジョリティには理解できない力学に気づくことができるかと捉える。
 - ◇ Allison Jaggar (1989)、Hilary Rose (1987)、Donna Haraway (1991)、Dorothy Smith (1974)、Patricia Hill Collins (1990)、Nancy Hartsock (1983)、Sandra Harding (1983)らによって、1970年代末から1980年代に発展した理論である。
 - ◇ スタンドポイント理論は、多くのフェミニスト理論と同様に、マルクス主義理論や批判的理論に傾倒し、特に知識生産における権力の影響に焦点を当てる。
 - ◇ 女性の経験の多様性を認めながらも、男女の思考方法、思考内容、重要視する事柄における違いに着目し、その違いに起因するジェンダー特有の立場に着目する。
- ・ スタンドポイント理論に対する批判
 - ◇ スタンドポイント理論の批判者は、スタンドポイント理論を、客観性の基準を放棄し、相対主義を受け入れ、女性の経験を特権化していると捉える。

3. ポストモダン理論 (8-10)¹

¹ フランスの思想家や哲学者を中心に発展を遂げたポストモダン思想は、知識生産およびジェンダーに関する考察を展開し、フェミニスト方法論に大きな影響を与えた。特に Judith Butler (1990) による *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity* (邦題:『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』) の登場以降、フェミニスト・ポストモダニズムは、フェミニスト方法論の主流となった。

- ・ Gannon and Davies(2012)は、ポストモダン理論に対するフェミニストのアプローチにおける5つの原則を提示している。
 - 1 すべての視点は状況化 situated されているため、客観性という概念に注意を払い、再考すること。
 - 2 書くこと／言説の実践のもつ影響力に注意を払うこと。
 - 3 人々の認識、理解、想像力を制限するような二元的なカテゴリーについて注意を払うこと。特にカテゴリーが互いに強く関連付けられる場合(例えば、「男性」と「合理性」)、それが、どのように／いつ採用されるのかを認識すること。
 - 4 権力関係は、言説と其中で想定される立場を通じて確立・維持され、行為主体性 agency と解放は偶発的かつ限定的なものであること。
 - 5 真実とされるもの、あるいは真実と認められた知識を深く疑うこと。

- ・ ポストモダン理論に対する批判
 - ◇ ポストモダン理論の批判者たちは、相対主義に陥る可能性を警告し、ジェンダーというカテゴリーが解体され、フェミニズム理論が放棄されることを懸念した²。

4. グローバル・ポストコロニアル理論 (10-12)

- ・ 1990年代に注目されたポストコロニアル理論は、ポストモダン理論の分派である。Pierre Bourdieu が植民地主義を「強制に根ざした人種的支配のシステム」として考察したことを踏まえ、ポストコロニアル理論は、人種と権力に根ざした考察や、植民地化を通じて抑圧された人々の関心事に焦点を当てた。

² 原則1に対する批判として整理できる。ポストモダン・フェミニストである Judith Butler は、ジェンダー・カテゴリーに不変の基盤などないのだから、フェミニストの戦略にも決まった方法はないと主張した。そして、「女性」というアイデンティティのもとへの動員ではなく、アイデンティティを転覆させ、ジェンダーの二分法を崩壊させ、ジェンダー規範を脱構築するような方向性を志向する (Connell 2002=2008: 218)。以上のような、固定的で本質的なアイデンティティとしての「女性」を拒否するフェミニスト・ポストモダニズムの戦略は、フェミニズムを駆動するための「女性」というカテゴリーを無効にすることを意味する (Riley 1988)。この点を問題視する Laura Downs は、「もしも〈女〉がただの空疎なカテゴリーだとしたら、なぜわたしは夜の一人歩きを恐れるのか」と題した論文の中で、〈女〉を社会的構築物として「脱中心化」しても、個々人はジェンダー化されたカテゴリーの中に生き続けなければならないとして、フェミニスト・ポストモダニズムの脱構築戦略を批判している (Downs 1993: 435)。

- ◇ ポストコロニアル・フェミニストは、フェミニズム運動における西洋的中心的な考えに疑義を呈した。
- ◇ フェミニスト・ポストコロニアル・アプローチの貢献は、グローバリゼーションと植民地化および帝国主義が、女性の物質的、心理的、社会的経験に深く影響を与えることを明らかにしたことである。
- ・ グローバル・ポストコロニアル理論に対する批判
 - ◇ ポストコロニアル理論の批判者たちは、女性たちの間の差異に過度に焦点を当てることによって、フェミニズム運動が分裂することを懸念している。

5. 人種に基づく race-based フェミニズム理論 (12-13)

- ・ 人種に基づくフェミニズム理論は、ポストコロニアル理論とともに、首尾一貫した全体を代表しうるようなカテゴリー（「人種」「女性」）の脱構築を強調してきた。
 - ◇ Patricia Hill Collins (1990) の研究は、社会学における人種についての議論を促進し、人種、階級、セクシュアリティとセックス、そして国家の交差 intersectionality に注意を促した点において画期的であった。
- ・ 人種に基づくフェミニズム理論に対する批判
 - ◇ 人種に基づくフェミニズム理論の批判者は、ポストコロニアル理論の批判者と同様に、女性間の差異を強調しすぎることによって、フェミニズムの分断が深まり、運動における共通の目標が消失することを懸念している。

6. クィア理論 (13-14)

- ・ 1980年代末に登場したクィア理論は、Michel Foucault の議論やフェミニストのポスト構造主義の流れをくみ、制度化されたジェンダーに基づく差別や抑圧を明らかにすることを目指している。
 - ◇ 既存のフェミニズム理論において排斥される複数のジェンダー、セックス、セクシュアリティを可視化した。
- ・ フェミニスト経験主義に対する批判
 - ◇ クィア理論の批判者は、クィア理論に基づく社会科学研究がアイデンティティ・ポリティクスに傾倒し、科学的というよりも政治的色彩を帯びていると批判する。

3. フェミニスト的評価：概念・反応・調査 (21-23)

- ・ 以上のフェミニズム理論を踏まえ、フェミニスト的評価の基本的な考え方を概説した

のが、Seigart and Brisolaro (2002) である。フェミニスト的評価は、政策における「有用性」の意味、評価者の役割と責任、そして社会正義の目的を考慮に入れる。フェミニスト的評価は、政策評価の分野において独自の貢献をしている。

4. フェミニスト的評価の主要原則 (23-31)

- 本章では Seigart and Brisolaro (2002) を参照し、フェミニスト的評価の主要原則を 8 つ挙げる。
 1. 知識は、文化的、社会的、時間的に偶然的なものである。
 - 知識は特定の時間、場所、社会的文脈と深く結びついており、フェミニストの政策評価者は、該当する知識の「状況性 situatedness」を認識することが義務づけられている。
 2. 知識は、明示的または暗黙的な目的を果たす強力な資源である。
 - フェミニスト的評価の視点は、データ収集者が、学んだことを共有する（または共有しない）能力、情報や知識を共有した人に謝意を示す（または示さない）能力を持つ立場にあることを認めるべきである。
 3. 評価は政治的活動である。
 - 評価者の個人的な経験、視点、特性は、特定の政治的スタンスから生まれる。すなわち政策評価には、評価者の政治的な視点、立場、関心、コミットメントが組み込まれており、それが彼ら／彼女らの行動を形作ることを認識すべきである。
 4. 研究方法、制度、慣行は社会的に構築される。
 - 社会的な構成要素としての研究・評価方法・制度・慣行は、支配的なイデオロギーの影響を受けてきたこと、また、特定の方法を生み出した人々の理論、学問的伝統、視点と同様に、その文化や時代の産物でもあることを認識すべきである。
 5. 知るための方法は複数存在する。
 - フェミニスト的評価は、直感・感情・愛情を、問題やプログラムのダイナミクスを理解するための正統な情報源として扱うべきである。
 6. ジェンダーの不公平は、社会的不公正の一つの現れである。
 - 差別は、人種・階級・文化にまたがるものであり、これらと密接不可分な関係にある。ジェンダーの不平等を認識し注意を払うことが、差別と既存のパワーダイナミクスをより深く理解する出発点であることを認識すべきである。

7. ジェンダーに基づく差別は、制度的・構造的なものである。
 - ・ ジェンダーが社会的に構築されたものであるのと同様に、ジェンダーに基づく差別も制度的・構造的なものである。差別は、個人によってのみ行われるものではなく、社会システムに浸透し、社会的組織の政策と実践の中に組み込まれている。
 - ・ ジェンダーに基づく差別は（他の形態の差別と同様に）、教育機関・政府・軍隊・メディア・家族・宗教機関・組織内などの社会機関の政策・実践・構造を通じて、女性の可能性を形成し制限する社会規範によって永続化されることを認識すべきである。
8. フェミニスト的評価者による行動とアドボカシーは、道徳的・倫理的な反応である。
 - ・ フェミニスト的評価者にとって、自らが選択する行動やアドボカシーの形態が、文化的・社会的・政治的にどのような影響を与えうるかを深く考慮することが重要である。

5. フェミニスト的評価およびフェミニスト研究に参加すること：フェミニスト・レンズを使う (31-35)

- フェミニストの理論家も実践家も、調査の文脈、自分の役割、収集したデータを理解するさいフェミニスト・レンズを採用するよう忠告している。
- フェミニストの評価や研究は、自分の視点、偏見、スタンスを自覚するための示唆を与える。
 - ・ たとえば、「再帰性 reflexivity」は有用なツールである。再帰性は、研究対象者の文化的・政治的・イデオロギー的な状況のみならず、理論家および実践者の立場を認識するために有用である。
 - ・ フェミニスト研究の実践において、再帰性とは「エスノグラフィックな知識の生産が、どのようなものによって形成されているかを分析すること」を意味する。
- フェミニストのレンズを使うということは、フェミニストの原則、あるいはフェミニストの理論についての知識を持つということでもある。このような知識は、女性学についての高度な理解を必要としない。むしろ、フェミニストの視点は、(理論や研究を含む)書かれた言葉、観察された経験、関係、そしてフェミニストの考えへの関与を通して得られるものである。

【参考文献】

- Connell, Raewyn, 2002, *Gender*, Cambridge: Polity. (多賀太監訳, 2008, 『ジェンダー学の最前線』世界思想社.)
- Downs, Laura Lee, 1993, "If 'Woman' is Just an Empty Category, Then Why Am I Afraid to Walk Alone at Night? Identity Politics Meets the Postmodern Subject," *Comparative*

先端課題研究 19 文献レビュー（ジェンダー研究・フェミニスト方法論）
一橋大学大学院社会学研究科非常勤研究員
永山理穂

Studies in Society and History, Cambridge: Cambridge University Press, 35(2): 414-437.
Riley, Denise, 1988, *Am I That Name? Feminism and the Category of 'Women' in History*,
London, Macmillan.